

# 城山麓の墓所 (七)

先人の跡をしるのぶ

山本

保

(会員・佐伯市池船)

## 一月本弥吉の墓

養賢寺より少し離れた、佐伯鶴城高校第二グラウンド

近くの山すそに、月本弥吉の墓がある。

その墓石には、

月本宗家之墓 (正面)

(左側面より——家祖小伝——)

家祖月本弥吉翁ハ堅田郷江頭村汐月万太郎ノ三男、

安政四年九月二十五日生マル。

幼ニシテ志ヲ立テ、佐伯城下ニ出テ、和泉屋屋号ヲ以

テ商業ヲ営ム。

古江村石丸仲右衛門ノ女ヲ娶ル。

長男芳吉家ヲ継グ。次男小策分家、三男珪作、四男瀬

一トモ出テ土屋家ヲ嗣グ。女山口正邦ニ嫁ス。

翁ハ壮年時代ヨリ、屢々藩政ト公共ノ事ニ尽スコト多ク、藩主毛利高謙ヨリ苗字帯刀ヲ免サレ、月本姓ヲ創始ス。

明治年間ニ至リ、国益橋ヲ架橋シ、衆ニ諮リテ佐伯港ヲ開港ス。亦第一回大分県々会議員トナル等、地方公共ニ尽ス所不勩

明治十八年一月九日卒去、年六十五歳

茲ニ墓地ノ改修ヲ為スニ当リ、誌シテ家伝ニ伝フ爾云

昭和十八年七月

四代 月本与一建之

次のような靈銘記も建てられている。

是教院 初代弥吉 明治十八年一月九日

妙義院 妻 コト 明治二十九年七月二十一日

梅月院 二代芳吉 明治三十年十一月三十日

慈性院 妻 ミチ 昭和十三年十一月六日

晃月院 三代孫弥 明治四十三年十月十日

理晃院 妻 マツ 昭和十八年四月一日

(以下略)

嘉永六年(一八五三)七月、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは、日本と条約を結ぶため、四隻の軍艦をひきいて、浦賀(神奈川県)へ来航し、大統領フィッシャー(十八代)の国書を幕府に提出した。

さらに安政元年(一八五四)、再び七隻の軍艦をしたがえて、ついに日米和親条約を締結させ、これによって長い間の鎖国時代は終わりをつけた。

佐伯藩(十一代毛利高泰)でも、その頃白濁火薬庫が爆発するなどの惨事をおこしている。

文久三年(一八六三)、佐伯藩主第十二代毛利高謙は内外の情勢を考慮して、台場(砲台)を女島新地・沖ノ洲海岸に築造した。

この年に、西谷小路及び虚空蔵下の火薬製造所が爆発して、数名の藩士が即死したり、また上久部皿山で大砲を踏造したりしている。

弥吉は、女島沖洲の台場造りに、銀子および石材百二

十艘を献上し、さらに請願して土工の監督者となり、毎日数百人の人夫を指図したりして、短時日の間に完工させた。

そのかどによって、御代官所より

覚

内町 和泉屋弥吉

一 紬地 但年始五ヶ日着用

一 年寄並仰せ付けられ、両町(内町・船頭町)寄合

の節は、讃岐屋万吉次席

一 びん付 蠟燭株御免

の覚書を頂戴した。

幕末における佐伯藩の功労者の一人である。

そして明治六年三月国益橋(諸木橋)が破損した時には、官木の払い下げを申請して、独力で修理し、明治十一年九月架け替えの際には、金五拾九円を寄付して、県から木杯を受領した。

弥吉の功績で特筆すべきは、佐伯港の開港である。

当時、港の施設がないために、入航する汽船は石間沖に投錨して、はしけで乗客や物資を運ぶという不便さであった。

時の南海部郡郡長齋藤利用（初代）に援助を求め、また地元有志の協力を得て、明治十六年九月に築港は完成した。埠頭は、延長三十五間、碇泊地は東西十町、南北三町で、船の出入りができるようになり、佐伯港発展の基礎をきずいた。

この頃、佐伯町から葛港に至る道路が開通している。

葛港着の汽船からおろされた物資は、団平船（積み荷船）に積みこまれ、長島川・内町川を上り、諸木橋の下をくぐって、月本回漕店本店（太平区・現在玉屋家具店）に陸揚げされているのが、通例であった。

なお、諸木橋近くに、月本小策邸宅があり、内町の守護神明神社、そして私立鶴谷学館もあり、上浦・海崎・大入島方面の船が往来して、にぎわっていた。

## 二 月本小策の墓

同じ墓地内に、月本小策の墓もある。

その墓石には、

月本家之墓 （正面）

（左側面より——家系小伝）

初代月本小策ハ、宗家月本弥吉翁ノ次男トシテ、文久

四年二月一日生マル。

明治十三年二十四ニシテ一家ヲ創始ス。

海運業及椎茸問屋ヲ営ム。

會テ南海部郡農会長、同茶業組合長、大分県會議員、

佐伯町會議員等ノ公職ニアルコト多年。

佐伯港開發、自宇目郷至佐伯港道ヲ開發セシメ、又佐

伯実業銀行ヲ創設シ、地方商工業ノ金融ニ竭<sup>ツク</sup>ス。

偶、日清戰役後ノ財界ノ大混乱ニ會シ、閉店ノ止ムナ

キニ至ルヤ、即私財ヲ悉ク提供シテ責任ヲ明ニ為ス。

合名会社月本組ヲ設立シテ、捲土重来ヲナシツツアリ

シモ、明治四十年二月四日没ス。

諦善院釈常祐居士（月本小策）

享年 五十一歳

盟友布岳小栗憲一師（善教寺住職）追憶白

儻議侃々 民権拡張 慧眼螢々 公益惟揚

百敗不撓 千頭益剛 孫謀垂統 祖業生光

呼快男子 死有余光

明治十四年高林甫助長女セイヲ娶ル。

内助ノ功績甚大ナリ。

昭和十一年四月三日歿ス。

慧念院釈妙意大師（小策夫人）

享年 七十五歳

（以下略）

佐伯港発達史には

「明治二十五年、月本小策（初代）は、官の許可を得て水深幾尋の海面を私費にて埋め立て、八〇〇坪の土地を造りて、石垣を築き、家屋を建築せるものなるが（月本回漕店）、その後も、漸次海面が埋め立てられ、現状にまで発展せられたり……」と記入されている。

明治二十六年九月三十日、私立鶴谷学館へ赴任した若き国木田独歩と弟収二は、汽船で葛港に着いた。そして人力車で、大手前富永旅館へ一週間余、ひきつづいて月本小策宅で二週間余り宿泊していた。

明治三十一年、葛港道改築請願書が、佐伯町長山口正邦（夫人・月本弥吉長女）によって県知事へ提出され、県道（現在・国道十号線）に接続されたのは、明治三十六年であり、この道路が、戦後、国道二一七号線へ昇格して、佐伯市内交通の大動脈の一つとなっている。

なお、市野瀬仁先生の名著「佐伯港の歴史と現状」、主として木材港について、昭和四十六年九月十日発行——は、佐伯市の発展と佐伯港の関連に触れた、示唆に富む研究録である。

月本家系図

